

SKYMENU 活用授業 実践レポート

名 前	清水 匠	学校名	土浦市立土浦第五中学校
実施学年	中学校3年生	教 科	道徳科
単元名	信頼し合える友情関係 自作教材『サプライズ』		

《学びを深めたいポイント》

本実践では、親友とのかかわりにおける葛藤場面を提示し、異なる意見の他者と議論することを通して、自分自身にとっての「友情」とは何かという道徳的価値を深めていく道徳科の実践を提案する。ここでは、サプライズ・プレゼントをつくるために親友と離れて休み時間を過ごしたことで、親友が寂しい思いをするという読み物資料を自作した。その中で、親友にサプライズのことを伝えるか伝えないかを議論させていった。親友だからこそ最大限のお祝いをしてあげたいと思う価値と、親友だからこそ悲しい思いはさせたくないと思う価値とがぶつかり合うことにより、友情において何を大切にするかという各自の価値観を根拠に自分の考えを伝え、互いの価値観を認め尊重しながら、議論を活性化していくことができると考えた。同時に、周囲に左右されることなく自分が正しいと思う行動をとろうとする誠実さや、相手の立場に立って物事を考える思いやりなどの価値にも、子どもたちは出会っていくだろう。そんな、様々な価値とつながっている「友情」について、多面的・多角的に考えを深めていく子どもの姿に迫っていくようにした。

《SKYMENU 活用のポイント》

本時では、ポジショニングアプリを活用して、思考を可視化した。読み物教材を読んで議論する場面では、誰がどのような意見をもっているのか「ポジション（立場）」をタブレット端末で一覧表示し、異なる考えを共有できるようにした。子どもたちは、友達の考えにじっくりと耳を傾けながら、多様な側面から友情を捉え、自分の考えに取り入れていった。また、教師用端末に、各自のポジションの変化や軌跡を表示し、考えの揺れ動きを可視化できるようにした。それによって、議論の流れを変えたい時や、取り上げたい意見をもっている子どもを瞬時に捉えることができ、意図的指名によって議論をより活発にすることができた。また、議論後の振り返りの場面では、自分の考えの変化を自分自身で確認できる機能を活用することで、子ども自身が考えの深化を意識化し、より深く自己と対話しながら自分の生活について振り返っていく姿が見られた。

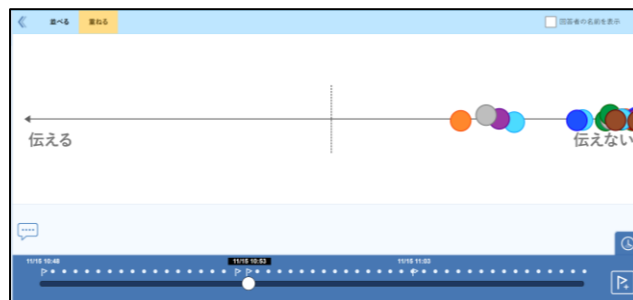
《実践内容》

	学習活動	SKYMENU 活用場面	活用のポイント
導 入	1. 本時の課題をつかむ。 (1) 教材「サプライズ」の第1部を読む。 (2) 本時の課題をつかむ。 サプライズのことを、かなこに伝えるべきか。	【*1】 ・ポジショニング機能で、自分の立ち位置を数直線上にポジショニングし、簡単なコメントを入力する。	・考えを可視化し、瞬時に共有していけるようにする。
展 開	2. グループや学級全体で議論する。 ・サプライズが成功すれば、数日間のことも分かってくれるはず。	・議論の最中でも、考えが変わったらその都度ポジショニングしていく。	・友達の意見を聞いて自分の考えを練り直す大切さを価値づけるようにする。
	3. 教材「サプライズ」の第2部を読み、再度、議論する。 ・こんなにかなこが心を痛めているなら、	【*2】 教員端末で、子ども達のポジションの変化をリアルタイムで捉	・多面的・多角的な意見を意図的に取り上げることで、子ども達の

	もう伝えたほうがいいのか。 ・あと1日の辛抱で、かなこのとっても喜ぶ顔が見られる。	え、意見を変えた子どもにその理由を問いかけたり、悩んでいる子どもに発言させたりする。	考えを揺さぶり、深く考えていけるようにしていく。
まとめ	4. 本時の学習を振り返り、自分にとっての友情とは何か、どのように行動したか考える。 ・本当の友情とは、相手の気持ちを誰よりも考えてあげることだと思う。	【*3】 ワードランキング機能で、コメントでよく使われていた言葉をピックアップする。 【*4】 自分の考えの変化履歴を見ながら振り返る時間を設定する。	・友情においてみんなが大切だと考えていることを浮き彫りにし、本時の振り返りにつなげていく。 ・自分の考えの変化を意識化し、深まりを自覚できるようにする。

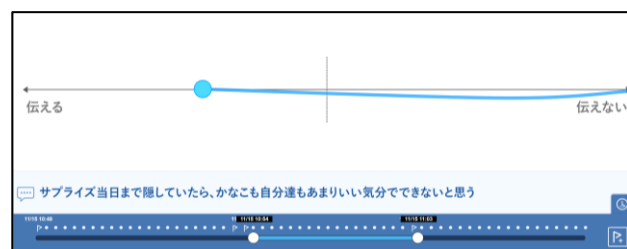
【*1】

読み物資料を読み終えたタイミングで、ポジショニングアプリを立ち上げ、サプライズを「伝える」「伝えない」を軸にしたシートを配付した。そして、各自の考えのポジションを決め、コメントを記入させた。入力済んだ段階で、子どもの画面にも全員のポジションが映るように設定した。すると、全員が「伝えない」側の考えであることに驚きながらも、友達の考えを聞きたいという思いをもつ子どもが多く見られた。友達のポジションをクリックし、コメントを読むことで、自分と異なる意見に興味をもったり、多様な価値観で判断しようとしたりする姿を生み出すことができた。



【*2】

その後、グループで考えを伝え合い、全体で考えを共有していった。話し合いの最中も、自由にポジションを変えたり、コメントを入力し直したりできるようにした。教員端末では、子どもがポジションを変更するたびに黄色く光るため、瞬時に子どもの変化を見取ることができた。



ある程度議論が進んでくると、動きが少なくなった。そこで、教員端末で分析機能「変化の大きさ分析」を開き、子ども達がどの程度考えを変容させたのか、思考のゆれの大きさを円の大きさに可視化する機能を活用した。これによって、相反する意見をもつ児童を意図的に指名したり、考えを変えた子どもにその理由をきいたりすることで、再度子ども達の考えを揺らがせることができた。例えば、とある子どもは、はじめの段階では「伝えてしまったら、サプライズで隠してきた意味がなくなる」という考えをもっていた。しかし、友達と議論する中で、「当日まで隠していたら、かなこも自分達もあまりいい気分でサプライズができない」という考えに変化した。教員がその考えの変化を、瞬時にタブレット上で確認できたため、指名をしてクラス全体に発表させた。すると、他の子ども達も、自分が準備していたサプライズは成功させたいという考えから、相手が悲しんでいるのでは目的と違ってしまわないかという考えに変わっていく子どもが多かった。このように、教員の意図的指名から、自分目線から相手目線の考え方へと、思考を深めていくことができた。

【*3】

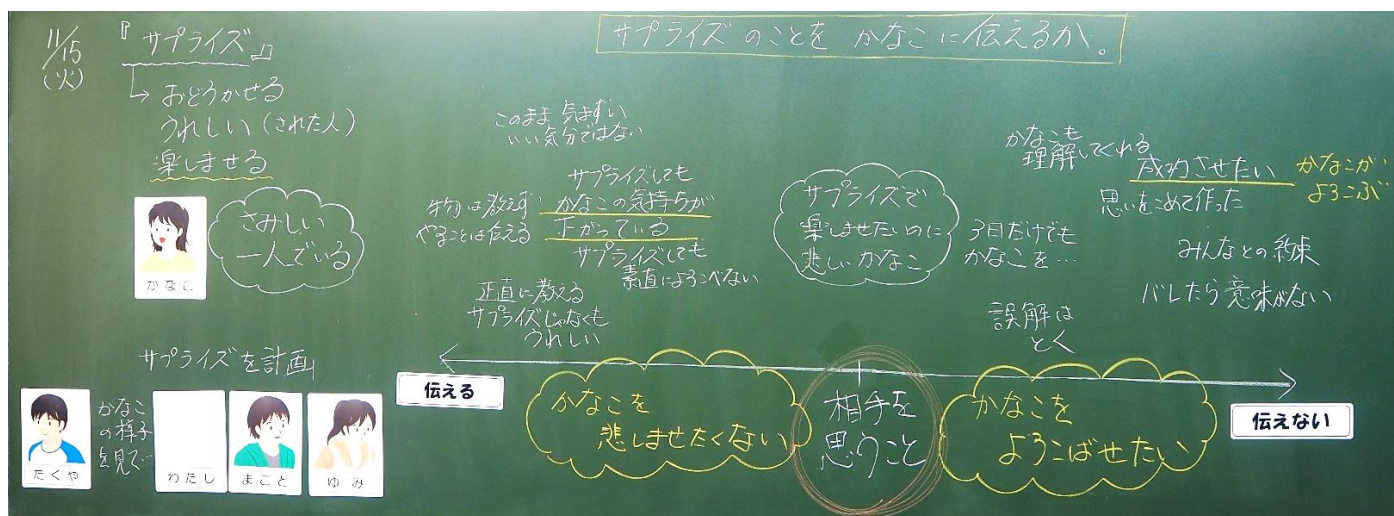
議論を終え、最終的に自分のポジションとコメントを入力し終えた段階で、教員端末の「ワードランキング分析」機能を活用した。指定した時点での子どものコメントを分析し、どのような単語が多く使われていたか、ランキング表示する機能である。本時では、議論のはじめでは、「サプライズ」「伝えない」「しまう」などの言葉が多く使われていた。

しかし、議論の終わりでは、「サプライズ」「かなこ（主人公のなまえ）」「気持ち」という言葉が多く使われていた。このことから、議論する前は、自分のサプライズを成功させたいという自分側の視点だったのに対して、議論をする中で、主人公の思いに寄り添う考えが増えていき、「かなこ（主人公）の気持ち」が伝えるべきかどうかの判断基準になっていったことを捉えることができた。これにより、本時のまとめとして、「伝える」「伝えない」に関わらず、相手の気持ちを想像したり、察知したりしながら、相手が喜ぶことをしていくことが友情であるとまとめるに至った。本時で目指す道徳の内容項目「友情」について、それぞれの立場から多面的・多角的に道徳的価値を深める姿が見られた。

使った人が多いワード		使った人が多いワード	
サプライズ	11件	サプライズ	12件
伝えない	3件	かなこ	7件
しまうから	3件	気持ち	5件
かなこ	3件		
伝えて	3件		
しまったら	3件		

【*4】

本時の最後には、今日の議論を踏まえて、これから自分はどうのように実践していくのかについて、ワークシートに考えを書かせた。その際、本時における自分自身の考えの変容を意識化できるように、「変容表示」機能を活用した。これは、時間軸に沿ってゲージを動かすと、その時の自分のポジションやコメントが表示される機能で、ゲージを動かしていけば、自分自身の考えの軌跡をたどることができる。子ども達は、自分がどのように考えを練り上げてきたか、どのように考えが深まってきたのか、自分自身で見返しながら、ワークシートにまとめを記入していった。



《実践を振り返って》

この機能は、教員が授業後に、自分の授業を振り返ったり、子ども一人ひとりの変容を見取ったりすることにも活用できる。例えば、下記の図は、同内容の実践を小学校6年生対象に実施した時の、ある児童の考えの変容と、友達とのかかわりを図示したものである。この児童は、まとめのワークシートに、「喜ばせようと思ってやっても、相手にとって嫌だったら意味がない。それに気づいてあげることこそ親友。はやく察知してあげたい。」と記入していた。本時のねらいに沿った、十分満足できる内容である。しかし、上記機能を用いてこの児童の45分間の変化をたどると、一番はじめの段階では、「あと3日間なんだから、ぜったいサプライズを決行させたい」という、自分目線での考えだったことが分かった。そして、どのタイミングで考えを変えたか調べたところ、議論の中で友達が発した「本来は喜ばせようと思ってサプライズをしているのに、悲しませては目的と違ってしまう」という意見を聞いた直後に、考えを変更している

ことが分かった。そこでは、「本来の目的は喜ばせることなのに、悲しませてしまっては意味がない」とコメントしている。このように、「変容表示」機能を活用することで、授業後に教員が、子ども一人一人の学びを立体的にとらえることができ、評価につなげていくことができると言える。

